史料保存利用問題シンポジウム

東日本大震災から一年、
資料の救済・保全の在り方を考える

日 時：2012(平成 24)年 6 月 23 日(土)　13：30～17：30

場 所：学習院大学 南 3 号館 201 教室（入場無料・事前申し込み不要）

開会挨拶：木村茂光（日本学術会議会員　帝京大学教授）

報　告

青木　睦（国文学研究資料館研究部准教授）

「文化財等レスキューにおける
被災行政文書の復旧活動と今後の課題」

永井康雄（山形大学地域教育文化学部教授）

「文化財建造物の被災調査と
復旧・復興に向けての官民協働」

岩崎真幸（みちのく民俗文化研究所代表）

「「伝承」という資料のゆくえ―原発事故被災地からの報告―」

閉会挨拶：高埜利彦（日本歴史学協会会長　学習院大学教授）

主催：日本歴史学協会・日本学術会議史学委員会

後援：全国歴史資料保存利用機関連絡協議会・日本アーカイブズ学会

史料保存利用問題シンポジウム2012

開　催　趣　旨

東日本大震災の発生から１年余りが経ったが、この間、各地の資料ネット等による被災資料のレスキュー活動が活発に行われてきた。被災地において、このような資料の救出・保全活動がさらに必要とされていることはいうまでもないが、震災の発生から１年余りを経たこの時点で、これまでの資料救出・保全活動の経験を踏まえ、今後の資料保存利用問題を考えてみたい。その際、古文書や行政文書はもちろんのこと、有形・無形の文化財等も含めて、広く資料の救済・保全はどうあるべきかを考えたい。とりわけ、大地震・大津波さらには原発事故による生活の場の喪失、ムラや地域の消失は、モノ資料のみならず伝承資料の消滅の危機をもたらしている。まさに、地域のアイデンティティーが失われつつある状況といえる。そうしたなかで、地域のアイデンティティーを支える有形・無形の諸資料を、いかに救済・保全し未来に伝えてゆくか、このような観点からの議論を試みたい。

連絡先　東京大学史料編纂所（近世史料部門）佐藤　孝之

TEL　03－5841－5977

E-mail sato@hi.u-tokyo.ac.jp